



会員のひろば

ライラックとアカシア

札幌市医師会
国立札幌病院 荻田 征美

北海道の春はいっせいに花が咲く。長い冬が去って、雪がすっかり解けた後は特有の春風が少し吹き荒れるが、それがおさまると、レンギョウ、梅、桜と続いて黄レンゲツツジに至るまで途切れることなく北海道の地表を飾る。その後思い出しのようにわずかの間、ひんやりとした日が続く。これをわれわれはリラ冷えと言っており、この頃に、ピンク、紫といったライラックの開花を迎えるのである。北海道を訪れる客に、「この時期の北海道は梅雨もなく最も気候の良い時期です。」と紹介している。

ライラックはモクセイ科の低灌木で白花の木は北海道自生であるが、ピンクや紫は外来種である。花には芳香があって薄暮の黄昏時にも花の咲いているのが、すぐにそれと判る。芳香と言えば、ライラックと並んでポピュラーな木はアカシアである。北原白秋の有名な詩の一節「此の道はいつか来た道、ああそうだよ、アカシアの花が咲いている」とか、20余年前、歌謡曲として歌われた西田佐知子の「アカシアの雨が止んだら、そのまま死んでしまいたい」とか、石原裕次郎の「アカシアの花の下であの娘がそっと涙を拭いた赤いハンカチよ」等、むしろライラックよりも札幌の住民は親しみが深かった。一方、ライラックの方はと言えば、フランス語ではリラとい、日本でも時代はアカシアより遙か戦前に遡るが「リラの花咲く頃」等という流行歌があった。それとても当時の歌手と共にとうに忘れ去られて仕舞い、市民にとっては今いちライラックの方に馴染みが薄

い。

そこで調べてみると、このアカシアなるものは、正しくは針えんじゅと言ってまめ科の高木である。丈夫で成長が早いため、北海道の開拓の時期にその木を燃料として使用する目的で移入した外来種である。安上がりなため、開拓時代には野山や空き地に移植され、さらに整地された道路脇には街路樹として植えられた。一時は開拓時を彩った時代背景となり、北海道の荒削りな景色を特徴付けていたことは確かである。そういう経緯から道民とは付き合いは長い。戦後のある時期まで各家庭では薪ストーブにアカシアや白樺の木を薪にして焚き、暖をとっていたことは歴然とした事実である。しかし時代を経ると共に、北海道の燃料が石炭、石油と移っていったことによって、アカシアに対する燃料としての需要は去って行った。

また、成長が早いため街路樹としても、電線と接触したり道路の信号を覆い隠し、果ては台風の時期などには太い枝や幹のところで折れて危険となるため、春と秋には剪定せざるを得ず、手間がかかった。かつまた根を浅い地面に張り巡らせるため、根はアスファルトの舗装道路を次々と割って盛り上がり、補修の費用にも影響した。時代の経過と共に街路樹には、美観の要素が求められ、ななかまど、すずかけのき、しだれやなぎ、ほうのき、かえで、いちょう、かしわ、みずなら、さくらやリンゴなどといった、木肌が美しいもの、秋には葉が色付くものや実を付けるものなど、それぞれの特徴を揃えた木に替えられていった。また、アカシアは高木となっても材質は脆く、到底建築資材にはならないため、年数を経たからと言って木の価値は高くない。おまけに特定の人にとっては花粉アレルギーの原因となり、悪いことづくめの印象が強かった。しかし、ライラックにしてみたところで、木肌はまあまあ悪くはないものの木は太くならないまま根から新しい木が出て

来て低灌木特有のいわゆる株立ちとなり、立木の周辺は藪のようになってくる。従ってライラックもまた街路樹には向いてはいなかったのである。

30数年前になるが、札幌市の木を決めるにあたって、木の名前を公募したという話を聞いたことがあった。中間発表では圧倒的にアカシアにその票が集まったそうである。そうしたところ、ご当人もアカシアアレルギーである学者先生から、前述のような理由を付けて、「アカシア如き品位のない雑木が札幌市を代表するなどとは以っての外であ

る。」と烈火の如く怒った強い抗議が出た由。市の関係者ももっともなことだと考えたかどうかは定かでないが、最終結果の得票数は公表されずに、「僅差でライラックに決まりました。」と、結果のみが明らかにされたとのことであった。今にして見れば、結果はそれで良かったとは思いますが、そうしてみるとアカシアにも花が咲くと芳香が辺り一面漂い、花は天ぷらにして食べることが出来るなど、そこそこ良い面もあることはあるのでアカシアには少し気の毒であったようにも思う。

同情の鶏、にくまれからず(鳥)

札幌市医師会 アンデルセン診療所 門脇 純一

鳥のインフルエンザ(インフ)が山口県からあちこちに感染を拡大して、テレビ、新聞を賑わしている。昨年度のSARSの大騒ぎは、今年は鳥インフに舞台を奪われた格好である。経済効率を重視した鶏の飼育法は一旦感染が起これると、つぎつぎと感染を拡大するので、感染阻止のためには、大量の殺戮をすることになってしまう。

超過密状態にある鶏が容赦なく処理されている姿は惨たらしい。驚いたようすのまん丸の目、早く小刻みにチョコチョコ歩く鶏の姿は愛嬌はあっても、憎らしさは感じない。したがって、大量の殺戮は同情を生む。そしてその経営者、飼育者が

自殺した顛末は世間の冷たさを覚えさせ、同情心を募らせている。

いっぽう、トリ・インフルエンザが発見された鳥のほうはというと、大量の殺戮をされてはいないものの、同情される話は聞かれない。あの狡猾そうな目付き、人間が近づいても最短の距離まで逃げようとする凶太さ、巣作り時の攻撃性は人間に好感を与えていない。鳥の人を越えた適応性は好敵手でもあり、この姿、行動は人間の同情を集める材料は見出せない。

鳥は少し減ってもよい。いまこの時に感染を起こして減る方がごみなどの環境問題を改善させるのに、役に立つのではという意見までである。鳥の肉を食べた人によると、結構いけるというのを聞いた。たくさん捕獲して、「やきとり鳥亭」でも作れば、鳥減少になるし、今風の酒のみ話として面白く受けた。

人間の道徳感、生態学も、このレベルだとすると、共生もそう簡単なことではなさそうである。

道医報表紙写真募集中!

当会広報部では、本誌表紙を飾る写真を募集いたしております。会員各位におかれましては、季節を折り込んだ傑作をどしどしお寄せ下さいませようお願い申し上げます。

フィルム：ポジカラー(スライド)フィルムの方が鮮明に仕上がりますが、通常の

フィルムでも結構です。横位置でのトリミングもお願いします。

コメント：題名、寸感を200字程度にまとめ添付して下さい。

—情報広報部—